

## 基調講演

### 日本の山は誰のものか～山の自然を正しく使うためのトイレ作法とは

NPO日本トイレ研究所理事 上 幸雄 氏

かつて、山のトイレは整備されていないか、汚くてとても使う気にならないのが当たり前の時代が長く続いた。山のごみ問題は、当時の大石環境庁長官が尾瀬でごみの持ち帰りを提唱したのがきっかけで、ごみが大きく減少し、著しく改善された。

富士山を例にとると、空き缶やごみを岩の隙間に押し込んだりしていた。またトイレは8月末の登山シーズン終了後、便槽からそのまま生し尿が流されていた。因果関係は明確ではないが、富士山の湧水が流れる静岡側の柿田川で大腸菌が検出されたこともある。

富士山のトイレ対策は1996年頃から本格的にはじまり、垂れ流しがなくなったのは静岡側が2004年、山梨側が2006年だった。

山で登山者はあるがままの自然を好む、つまり都市部と違う不自由さをあえて求める人が少なくない。そのため、便利さや快適さを求めて施設はどこまで、どうするかを考えながら整備されてしかるべきと思われる。

入山の目的は、登山、釣り、アウトドアスポーツ、レクリエーション、教育、林産業などさまざま。トイレの必要性も異なる。適正な場所にトイレが必要であるが、交通、水道などのインフラが不十分であることとのバランスもある。

トイレはとくに、管理、情報伝達が重要である。つまり、広報である、利尻山ではトイレがなく、入山者は携帯トイレを持参し、ブースで使用したら、下山口の回収ボックスまで各自で持ち帰る。大雪山でも2018年から携帯トイレの導入を始めた。ただ、持ち帰った後の処理処分が適正でないためである。コロラド州やアラスカのマッキンレーでは排泄物は容器に入れて持ち歩き、それをチェックされる。

野外排泄も穴を掘って埋めるなどルールがある。その状況を入山者に理解してもらわなければならない。常設トイレの設置場所も大事で、屋久島にトイレをつくった経験があるが、場所は登山口から2時間のところで、縄文杉まであと2時間のところで、人の生理現象を考慮して設置した。

八方尾根は水が豊富にあるので、水洗式にしてパイプラインで下におろしているが、水のない山が多く、山では汚水処理量が増えるので、必ずしも水洗でなくてもいい。

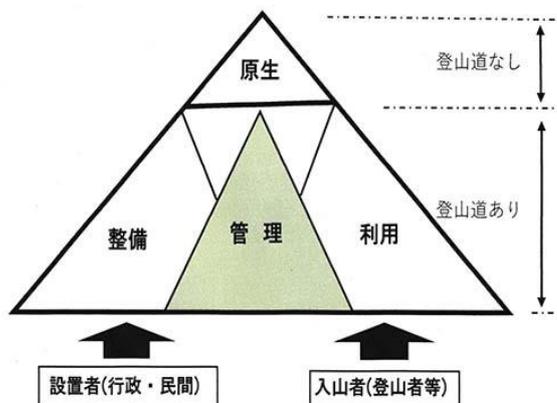
費用負担については有料にすると、公共団体の一般歳入に入ってしまうので、チップ制などもある。上高地では、年間3千万円くらいのチップ収入があり、周辺のトイレも含めてメンテナンス費用に充てている。

入山者数は登山シーズン、週末など大きな変動があり、トイレを含めどこまでピーク対応すべきかの課題がある。尾瀬ではできるだけ平日利用をしてもらう努力をしている。その結果、入山者の減少につながり、関係者は悩んでいる。一方、屋久島では、縄文杉のトイレがきれいになってから入山者が増えた。

山岳トイレは環境に応じて様々なものが開発されている。バイオトイレ、土壌処理方式、燃焼式、携帯トイレなど。トイレをゴミ箱として使ったり、マナーを守らない人がいないようにする必要がある。ある山小屋のトイレの改修の時、し尿貯留槽の7割がビニール、弁当容器、衣類などのゴミであった。

アジアの山ではインドネシアのリンジャニ山は聖山なのにトイレとゴミがひどい状況であったし、インドシナ半島の最高峰のベトナムのファンシーパン山は、素掘りのトイレだったが、埋めているが、もう穴を掘る場所がないというような話だった。

尿尿をどこでどうす、処分するかを最初に考えて、トイレの計画をつくる必要がある。トイレも社会インフラであり、登山道の付帯設備として、整備を行っていくことが肝要。また、情報を適切に伝えていく必要がある。また管理が重要で行政と設置関係者、利用者、ボランティアが各々の役割を果たす必要がある。



1. 整備の推進と目標・計画の設定
2. 管理の役割・責任分担
3. 利用の推進と一定割合の管理・責任の分担
4. 原生自然の保護と利用の制限

図1 登山道の整備・管理・利用の役割・責任分担